

学校を知ろう！

＜子どもを育むネットワーク構築の取り組み＞

奥山こどもクリニック
奥山 力

1

本日の概要＜連携のための取り組み＞

1. 発達や愛着を持った子ども達の**現実の理解**
2. 教育関係者の**視点**の理解と連携＜コロナ前＞
3. コロナ禍の**実情**に伴い**連携の変容**
4. コロナ後は新しい連携の形へ**シフトチェンジ**

2

1

小児科の先生って暇なんですね

- * これは、20年以上前のある発達と愛着に特徴のある子どもとの関わりです
⇒当時は診療が休みの日に、診ていた子ども達の学校や家庭を訪問していた
⇒子どもや家族の視点だけでは、客観的なアプローチは難しいことを痛感！
- * 施設や児童相談所・警察との関わりも増えていき、まず教育現場の視点の理解を進めなければならないと考え、**子ども支援 ラブシー研究会**という教育関係者向けの勉強会を立ち上げて、現場での問題に向き合う場を作った
- * 当時の病院には専門外来はなく、一般外来が終了後、発達障害や愛着障害を抱えた子ども達や保護者と向き合い、その対応や支援を主体に行っていた

3

医療的なアプローチの限界？

- * 愛着を抱えた子ども達への向き合い方に限界を感じ、混迷していた。
- * 小児科一般診療を離れて、**子どもの育ちの問題に向き合う**ために教育学部の大学院生や教師が参加していた教育実習に紛れてフィンランドへ
<教育や育ちの問題に関する疑問の払拭のために **愛着障害とは？**>
⇒保育園から小学校・中学校・大学 教育委員会や特別支援学校やネウボラなど子どもの育ちに関わる生活空間を片っ端から訪問し、疑問をぶつけた
- * **子どもの育ちの問題に関する視点が180度変わるきっかけ**になった。同時に当時はあまり学べることのなかった、大人とは異なる子どもの脳の発達に関する、メカニズムを探求するような命題を与えられた気がした

4

* 基本的に保育園の基礎になっているのは、子ども達は何も勉強しなくてもよい、身につかなくてもよいという視点です。
子どもが子どもであればよい！遊ぶだけで充分！
子ども達に余計なプレッシャーを与えないことが一番大切なことなのです

＜タンペレ ヴィツリラ保育園園長先生＞

* 行動制御が苦手な子への対応
* こだわりが強い子への対応
⇒子どもをしっかりと受け止めながらコントロールされないスキルを見せつけられた

5

教育機関との連携<コロナ前>

- * 教育関係者の視点の理解とその視点に基づいた対応を検討
- I) 子ども支援 “ラプシー”
 - <困り感のある子ども達への教育的支援を目的に開催>
教育関係者のための勉強会 第198回開催（20年以上開催）
⇒幼稚園・保育園の先生や園長、小・中学校の先生・相談員・支援員・教頭・校長、教育委員会職員・教育センターの職員、福祉関係の職員など
- II) 学校訪問<教育委員会主催・保護者からの依頼> ⇒受診前の家族の支援
 - * 定期的な学校訪問（子どもの行動観察・保護者の相談等）、講演会の開催
双方の視点を意識した支援会議、小・中学校・保育園の先生方との勉強会
- III) 埼玉県総合教育センターのスーパーバイザー（今年で13年目）
 - 教育専門誌への寄稿・教育指導者や支援員の為の定期的な講演活動

6

行政機関との連携<コロナ前>

* 形骸化しない行政との連携？

＜子育て支援課・福祉課・保健センター・児童相談所・警察などの視点＞
地域として子育て問題に取り組む体制の強化

I) 児童相談所・子育て支援課・福祉課・保健センター・関連施設・警察
などとの関わりや要保護児童対策協議会での講演と個別対応による実践

II) 行政主導の定期的な講演会を行うことにより、地域の方々に多角的な
視点を学ぶ機会を持たせると同時に、子どもを取り巻く現状に対する
意識変化をもたらすことにも繋がると当時は考えていた？

7

子ども達の居場所探し<コロナ前>

* 当時は虐待に対する認識がまだ十分ではなく、普通に生活している
様に見える子ども達の中にも、かなり厳しい環境を強いられている
子ども達や、発達の特徴が十分認識されていなかったために、関係性の
構築が難しくなっているご家庭も多かった（PT⇒母の会の開催）

* 子ども達の居場所探し<適切な距離感の認識や連携の難しさを知る>
サポート側の厳しい体験やジャングルの中の温かい施設、山村留学
できる場所の訪問など気づきが多かった。そこで、発達や愛着に
問題のある子ども達の特徴の理解を求めるために講演会を開催

8

コロナ禍

小児科として、**感染症対策が主体**となり、当時のクリニックでは、**感染の最前線にいる私が個別での対応**やカウンセリング、学校・家庭訪問や関係機関との支援会議は一切できなくなってしまった
⇒それでも**子育て支援？**のためにできる形に変容しなければ！
⇒今までののような形で、発達や愛着に問題のある子ども達の**個別な支援**は難しくても、行政機関や教育関連での指導者の養成、いろいろな子ども達の視点や育ちに関するアプローチ、そして**子どもの育ち全般**に関する取り組みに、**シフトチェンジ**して関わっていかなければならぬことを考え、検討を開始した

9

コロナ禍

特にコロナ以降、**発達に関わらず不安や緊張の高い子が多く診られ、子どもの不安に対する理解と対応のバリエーションを立体的に進める**ことに重点を置かなければいけないと考えるようになった。そのためには、多職種・異業種の方々の力も借りて、汎化できるような活動や、**子どもの育ちを支援する**ためのネットワーク形成やシステム形成に取り組んでいく様な活動を行っていくことから始めたことにした。
⇒自由に遊びや運動ができる、子ども達が思いっきり大声で叫んだり騒いだりしても大丈夫な様に、駅前にあったクリニックから近くに**居住地の全くない公園に隣接した静かな場所に移転した。**

10

移転してまず行ったこと I

- 1) 市内の全小・中学校の全クラスの子ども達の様子を見学させて頂いた
⇒そこで現時点で先生方の抱えている問題を拾い上げる
*学校訪問後、教育委員会主導で先生方の勉強会を開催
⇒問題点に関する事例検討とそれに基づいた講演会
<ACT・不安のメカニズム・発達障害の子どもの視点・小児心身症の理解
と具体的な対応方法・発達行動療法（回避スキルの理解）など>
- 2) 近隣の小・中学校の学校運営協議会に参加し、現時点での保護者の問題点の
確認と地域連携の問題点を考える機会を持たせてもらった
- 3) 休止していたラブシー（198回開催）研究会や幼保の先生方との勉強会の再開
⇒コロナ禍の途中からは、ZOOMでの開催も試みたが不評でクリニックで開催

11

移転してまず行ったこと II

- 4) 行政との連携 要保護対策協議会での取り組み 児相・警察との情報交換
⇒情報収集と連携を深める 虐待への意識の高まりと支援体制の構築
*市議向けの勉強会や教育関係者向けの講演会（教育長も参加）の開催
*行政職員や保護者向けの子育てに関する講演会
<感染面を考慮しながら、クリニックでも講演会が開催できるようにした>
*訪問看護事業者との連携で身近でも子どもの受け止めを行える環境づくり
<子どもとのコミュニケーションスキルや発達の視点の特徴に関する情報の共有>
*成人した子ども達の犯罪の問題
<触法少年に対する警察との連携と子育て支援の再検討>
⇒子育て支援ではなく、子どもの育ちを支える形でなくては、周囲に求めすぎて
しまい、お互いがコントロールされる形となり、結果的に苦しくなってしまう

12

移転してまず行ったこと III

- 5) **発達の特徴に関わらず不安の強くなってしまっている子どもの心身の問題** <身体化症状や不登校問題など>
⇒ACE <逆境的小児期体験>の視点に基づく理解と、**実用**を試みる
- 6) 保護者との関わり方の問題
<生活環境の変容に伴う家族の問題・初任者に対する教育の問題>
⇒総合教育センターでの動画の作成？ AIを活用した試み？
- 7) 子どもの育ちに関しては、講演会だけでは**一時的な理解**？
⇒保護者や先生方に子ども支援の概要を意識し、理解してもらう
ために**本を出版** <移転を決めてから作成>

13

コロナ後の新たな連携体制の構築

* 発達や愛着の問題に関係なく、**不安や緊張が高まった多くの子ども達**に対する支援体制を構築するにはどうすればよいか

↓

- ①声を届けることが出来ない、または困っている事に気づいて
さえいない子ども達を早期に拾い上げるための**システム作り**
- ②拾い上げた**子ども達の視点を理解**した支援体制の構築
子どもの視点を理解する事と多職種や異業種との連携の構築

14

発達の特徴に関わらず不安・緊張が強い子

ACE<逆境的小児期体験>としての視点

1) 虐待の問題

身体的・心理的・性的

II) ネグレクト

身体的・情緒的

III) 家庭内の課題

- * 家庭内の薬物乱用
- * 家庭内の精神疾患
- * 母親(父親)に対する暴力の問題
- * 家庭内の離婚・別居
- * 家庭内に収容者有

その他 貧困の問題等

→ 二次的な要因としての
身体疾患としての問題

↓

虐待に対する認識の甘さ

15

ACE (Adverse Childhood Experiences) 逆境的小児期体験

* 小児期の逆境的体験と成人病との関連

⇒ **数年から数十年後に循環器疾患・呼吸器疾患・代謝性疾患・ガン・脳血管障害などの確率が異常に高くなってしまう**

<ACE0と4比較⇒脳卒中2.5倍・心疾患1.8倍・肥満2倍・抑うつや不安は約3倍 ニュージーランドの研究>

↓

小児期の逆境的体験が、予測不能な慢性的なストレスを感じる状況を作り出し、ストレスホルモンが継続的に分泌されることにより、サイトカインが活性化し、炎症状態を維持してしまう

⇒ 特に免疫システムへの関与

16

不安を抱える子どもの育ちを支える <子どもの視点に触れる>

- * AIを駆使して、子どもの視点で子どもに関わるためのプログラムの作成（ChatGPT?）や言葉の出ない子ども達の不安を汲み取りアプローチするためのアプリの作成とそのシステム構築
- * AIの専門家チームと連携し、データ管理の安全性の明確化を図る
⇒最近話題のAIでのフェイク画像／動画作成に利用される等は絶対に避けたいので、権利関係だけではなく、悪意ある二次利用防止システムの構築を検討中
- * 協力依頼できる関係機関との連動（開発費の捻出など）
⇒データ収集のためのシステム作り（保育園・幼稚園・小中学校など）や今後の活用場所（乳幼児・学校健診など学校関係以外に施設など）の検討が最重要課題

17

なぜこのようなツールが今必要なのか

このアプリは、言葉にできない子ども達の心の声に耳を傾けるための第一歩として必要なものです。従来の支援システムでは見逃されがちだった子ども達の小さなサインを捉え、孤立する前に支援の手を差し伸べることができる。それがこのアプリの本質的な意義です。

1.社会的背景の変化

新型コロナウイルスをきっかけに、社会は急速に非対面化・孤立化が進みました。学業のストレス、家庭内の問題、友人関係など、さまざまな要因によって不安を抱える子ども達が増えているにもかかわらず、それを表現する手段が限られています。不登校や長期欠席、学校への適応困難などの問題は、以前よりもはるかに速いペースで増加しています。これは単なる個人の問題にとどまらず、社会全体の構造的な課題へと広がっている状況です。文部科学省のデータによると、不登校の児童生徒数は過去5年間でほぼ2倍以上に増加しており、これは「社会の危機を示すサイン」と捉えるべきでしょう。

2.従来の制度の限界

これまでの相談体制や学校の支援制度は、目に見える問題行動が現れた子どもたちに対してのみ対応する傾向があります。しかし、多くの子ども達は、自分の感情を言語や行動で明確に表現することができず、「静かに消えていくように」孤立してしまいます。教師や保護者であっても、その微細なサインに気づくのは容易ではありません。

3.テクノロジーがもたらす可能性

表情、声のトーン、行動パターンなどの非言語的なサインをAIが静かに検知し、「記録」あるいは「可視化」することが可能になります。これにより、子どもに負担をかけることなく、早期のタイミングで小さな変化を捉え、そつと寄り添うことができる「心理的な距離の近さ」を実現できます。特に、自己表現が苦手な子どもや、相談室に足を運ぶことさえできない子どもたちに対しても、「デジタルを通じた温かい観察者」として関わることが可能になるのです。

18

どんな思いが込められているのか？

このアプリは、子ども達の表情・視線・姿勢・声のトーンなど、言葉にできない心のサインをAIがやさしく読み取り、子ども自身も気づいていない気持ちにそっと寄り添うことを目指しています。

1. 言葉で感情をうまく伝えられない子どもたちのために

「さみしい」「つらい」そんな気持ちがあっても、「だいじょうぶ」と笑ってしまう子どもは少なくありません。とくに幼児や小学校低学年の中の子どもは、自分の感情を言葉にするのがまだ難しいこともあります。でも、その気持ちはしぐさや表情、目線にきちんと現れています。

2. 忙しい日常の中で見過ごされやすい、小さな心のサイン

毎日顔を合わせている保護者や先生であっても、ささいな変化に気づくのは簡単ではありません。「最近ちょっと元気がないな」と思ったときには、すでに心の中で苦しんでいることもあります。このアプリは、日々の感情の変化を記録し、そっと知らせてくれるツールです。

3. AIが感情を理解し、共感する時代へ

いまのAIは、情報を伝えるだけでなく、感情を読み取り、やさしく寄り添う対話もできるようになってきました。この技術を活かし、子ども達の気持ちに反応し、ぬくもりを持ってつながれるAIの「ともだち」をつくることが可能になりました。

4. 小さなサインに早く気づくことが、一生を支える力になる

研究によると、心の問題は早期に気づき、適切なサポートを行うことで、うつや不安、学業不振や社会性の低下などを防ぐ可能性があるといわれています。子どもが出している心のSOSを見逃さず、そっと受け止めてあげることが、健やかな成長の第一歩になると私たちは信じています。

19

子どもの視点を理解するために大切な事

1. 子どもの脳の発達のメカニズムの理解
2. 発達行動療法
3. 遊びや運動のプログラム
4. コミュニケーション法<ACTについて>
5. 医療的視点からのアプローチ

20

1. 脳の発達のメカニズム

* 経験論的にではなく、幼児期・思春期前・思春期の各段階における大人とは異なる子どもの脳の発達や身体発達のメカニズムを理解した対応を考える

- ①大人とは異なる子どもの脳の成長のメカニズムの理解
- ②子どもの不安のメカニズムに関する理解
- ③「愛着」や「発達」に特徴のある子ども達の独自の視点の理解と対応について！

21

2. 発達行動療法

* 発達行動療法とは、対応する大人の視点に惑わされずに、その子が持つて生まれた視点に基づいて、意識化させるアプローチを行動をもとに評価するものです。自己の意識を高めることにより、他者をコントロールすることに意識を費やすのではなく、自己評価を高め自分らしく生きていける人間を育てることを主眼とした考え方です。特に重視しているスキルは、その子の発達や理解の特徴に即した逃げ方を考える、回避スキルの獲得です。

22

意識化させるために必要なこと

予想に対する裏切りと
過去の意識との繋がりを持たせる過程

＜無駄でも楽しいこと（好奇心）の重要性について！＞

+

* AIを駆使して、言葉の出ない子ども達の不安を汲み取り
アプローチするためのアプリやシステム構築の原点

23

3.遊びや運動のプログラム

* 幼児期から思春期前

自分のペースで楽しく動くことが大切＜脳の発達の視点＞

自由で危ない遊びで、深層筋を鍛え自己コントロールを楽しむ

* 思春期以降は、興味のある運動に必要な、安全で効果的な身体の動かし方の理解とそれに基づいた体幹トレーニング

* 子ども達は遊びを通じて、対応困難な記憶を適応可能な現実的な記憶に書き換えていく作業をしながら、自分の居場所を探す

24

12

内観力を育む運動教室 <PEAT ピート>

マットやマシンを使ったピラティス運動やサスペンションを使った運動など多様な感覚を駆使した動きを通じて、
子ども達が楽しく自分の身体をコントロールする力と
気づきを育てていきます。

また多くのスポーツに必要な強い体幹力を、自然に
意識的な気づきへと段階的に成長させていく教室
でもあります。

4.コミュニケーション法

- * 幼児期や発達に特徴がある子ども達の、コミュニケーションの特徴についての理解
⇒予測不能なストレスにも繋がるダブルバインドの理解と実践
- * ACTの概念と理論体系に関する理解
思春期前の言語化できにくい部分の理解や思春期の子ども達の表現していることと伝えたいことのギャップに関する理解
⇒思春期の子ども達にネガティブ感情が表出した時の理解と具体的な実践練習
- * ACT(Attachment Communication Training)の学び⇒子どもの言葉は、語られることが重要、内容は嘘でも本当でもどうでもよい視点

5.医療的視点からのアプローチ

- * 子どもの感染・免疫などの基本的な疾患に関する理解
- * 急性期対応の処置(蘇生含む)に関する理解
- * 子どもの視点から見た、心身症や身体表現性障害などの疾患の理解と具体的な対応について<睡眠・起立性調節障害・不定愁訴(腹痛・頭痛など)・夜尿・アトピー性皮膚炎・過呼吸・自傷・摂食障害など>
- * 県立総合教育センターにて動画作成
⇒現場の先生方の疑問に即した形での疾患理解と対応を求める